

## 大阪成蹊短期大学 令和三年度 入学式式辞

今年の桜は例年より早く満開となり、野も山も春化粧を始めたように、陽春に満ちた季節となりました。

只今、7学科、計599名に入学許可を行いました。皆さん、ご入学おめでとうございます。

例年、多数のご来賓の皆さんにご臨席を頂き、盛大に入学式を行っていましたが、今年は新型コロナの感染を防ぐため、縮小して式典を行うこととしました。

そのような中であっても、私たち教職員と在学生は、皆さんの入学を心から祝うとともに、皆さんの入学を大いに歓迎いたします。

この1年間、新型コロナの感染拡大により、皆さんの高校生活も様々な影響があったことと思いますが、本学でもこれまでに経験したことのない試練でした。コロナ感染防止に努めながら学生の学修保障をどうするかという大きな課題に直面しました。昨年の前期、初めて遠隔授業を行うにあたって、全学生へネット環境整備資金の給付や、1000台に及ぶノートパソコン、タブレットの貸出しなど、情報機器の環境整備を整えるほか、遠隔での教材に個々の教員は工夫を凝らすなど、学科の学びを具現化できるよう遠隔授業に取り組みました。授業後に実施した授業評価アンケートでは、学生の皆さんから通常授業以上に高い評価をいただくことができました。

後期では、ほとんどを対面授業に戻した結果、今年就職内定率は、全国平均が90%を切る中、本学ではコロナ前の昨年と同レベル、ほぼ100%の内定率を達成しています。本学は全国でも数少ない7学科13分野の学びを誇る総合短大ですが、コロナ禍であっても就職に強いという本学の強みに全く変わりはありません。

このような、コロナ禍での遠隔授業を可能にしたのは、近年のIT環境の発展、インターネット社会での情報インフラの進化にほかなりません。現在、超高速大量通信のインフラが普及し、AIやICTなどの革新的なデジタル技術が驚く速さで進展しています。このような情報革新は、社会構造の変化を生んでいます。7年前、AIの研究を行っている米オックスフォード大学のマイケル・オズボーン教授は、コンピューターによる自動化が進むことにより、20年後の将来には47%の仕事が、AIやロボットによって代替され、仕事がなくなるという衝撃の論文を発表しました。また、昨年5月、全世界の主要企業と関わっている大手コンサルティング会社のマッキンゼー・カンパニーの調査でも、日本の労働環境にあてはめると、2030年までに日本中の業務の27%が自動化され、ロボット・機械に代替される可能性があるとして指摘しています。

では、このような社会で、私たちはどのように生きていけばいいのでしょうか。そして生きるために、本学で何を学び、どのような能力を身に付けるとよいのでしょうか。

ある有名な社会学者は、このような社会になればなるほど、人には二つの能力が益々必要であると述べています。それは、進展する社会に適応する能力と人間力です。社会に適応する能力とは、テクノロジーとマネジメントでのクリエイティブな力です。技術革新が進む社会では、他の誰かが真似することができない独自の技術、言い換えるそれぞれの分野で特化した技術が求められます。また、最新の AI 技術の周辺に生まれる新たな仕事に適応する技術やマネジメントの能力も必要でしょう。この社会に適応する力とは、いわゆる「才能」と呼ばれるものです。

しかし、才能ある人だけが人の社会に通用するわけではありません。もう一つの能力として、人間力は欠かせません。人との関係性を円滑に維持する力、他者への思いやり、他者を尊敬し、愛せる力、ヒトがヒトらしい能力です。ロボットや機械が持たない人間力がなければ、社会で活躍することは難しいでしょう。この能力は、人という文字が付く「人徳」とも呼ばれるものです。これは、本学の建学の精神となっており、本学での学びの中核をなしています。

さて、AI 技術が発展する未来社会においても、人に求められる資質が「才能」と「人徳」であるという示唆は、興味深いものがあります。それは、歴史を遡ってみると、時代背景は異なっても、人には「才能」と「人徳」が普遍的に求められているという事実があります。

歴史上最も古い記述として、約 800 年前の鎌倉時代の軍記物語である平家物語にも、武将に求められる資質として「才能」と「人徳」が上げられています。それは、「器量」という言葉で登場します。壇ノ浦の戦いで敗者となった平家の総大将 平宗盛は、優勢であった戦いに負け、相手に命乞いを求めるなど、才能も人徳もない人物として「器量なしの宗盛」と書かれています。

現在、「器量」と言うと、容姿や顔立ちのことと思いがちかもしれませんが、本来の意味は違います。

「器量」の器(き)とは「うつわ」という文字です。広辞苑では、器という「うつわ」は材の在るところ、材とは才能のことです。また、「器量」の量(りょう)とは、徳の充つるところ、人徳を表す漢字です。

つまり「器量」とは「うつわ」に入る一定の量という意味なのですが、その「うつわ」を〈人の才能が入るところ〉と〈人の人格や徳が入るところ〉とみなして、能力や徳力を言うことばとして使われるようになったものです。その器量という「うつわ」に才能や人徳がどれだけ入っているかによって、その人の評価される言葉となっています。

今も昔も、現在のように大きな変革の時代になっても、人に求められるのは、時代に対応する「才能」と「人徳」であるということです。

入学された皆さんには、ぜひ「器量を高めてほしい」と思います。本学の各学科では、優秀な教員から得られる専門的な知識と技術は無限にあります。じっくり自分の将来を考え、自分の進路や人生を考え、その実現に向けて必要な知識や技術をしっかり身につけてもらいたいと思います。これからの社会が求める才能は、本学の学びできっと開花することでしょう。

また、本学は我が国最大規模の短大であり、学科や部活動で多くの友人ができるでしょう。多くの友人、先生方とも関わり、関係性を深めて下さい。そして、インターンシップやボランティア活動など、いろいろな課外活動にチャレンジしてください。きっと、自身の人間性を豊かなものに成長させることができるでしょう。

令和の時代に生きる皆さんは、本学の学びの中で、才能と人徳を磨いて、いわゆる「器量人」となって下さい。短大での2年間は短くても、学修への意欲と努力によって、これまでの人生で最も充実した時期になると思います。飛躍する皆さんを大いに期待しています。

改めて、ご入学おめでとうございます。

令和3年4月1日

大阪成蹊短期大学学長 紺野昇